



ニュースレター Vol.19 2013. 7月号

今月は、大阪で、浦安で、東京で、イエナプラン教育に関する勉強会が開催されました。日本イエナプラン教育協会のFacebookページも徐々に盛り上がってきています！7月号は、広がりつつあるイエナプラン教育への皆さんの情熱をお伝えする、盛り沢山の号となっています。どうぞお楽しみ下さい。

編集(田村)

第18回

子どもたちに、20年後、どんな大人になってもらいたい？

協会代表 リヒテルズ直子

子どもを持つ親として、学校で子どもたちを教えている教員として、また、社会で若い人たちの育ちに携わる仕事をしている人として、あなたは、自分が関わっている子どもたちに将来どんな大人になって欲しいと考えていますか。この子たちが大人になる何年も先の社会は、一体どんな姿のものなのか、じっくり考えてみたことがありますか？

子どもたちの未来を考える

生まれたばかりの赤ん坊、まだ母親の腕に抱かれてすやすや眠る赤ん坊を見て、私たちはよく、「この子が幸せな大人になれますように」と祈るような気持ちを抱きます。同時に「この子が大きくなった時に世界はどうなっているのだろう。安心して暮らせる社会だろうか」と親心に一抹の不安もよぎるものです。

ところが、子どもたちがやがて保育園や幼稚園、そして小学校に入学する頃には、赤ん坊の頃に抱いていた「幸せになれよ」という願いよりも、みんなに遅れないようについていけるように、先生の言うことをよく聞いてちゃんと勉強してくれるように、できれば良い成績をとってうまくよい学校に行けるように、と数ヶ月かせいぜい数年先、場合によっては今日一日の心配に捉われてしまいます。そのようにして保育園や幼稚園や小学校に入ってきた子どもたちを受け止める教員たちも、遠い先のことよりも、自分がその子たちを受け持つ学年だけは間違いがないように、楽しいクラスになるように、問題児が出ないようにとは思っても、この子達が大人になったときどんな仕事につくのだろうかとか、どんな社会になっているのだろうか、と考えながら子どもたちに接することは、なかなか無いと思います。

もちろん、そういう今いる場でその時々心配をすることは決して間違ったことではないし、子どもたちの日々の成長を見守る大人たちに課された、大切な役割であるには違いありません。でも、それと同時に、そういう目の前の心配のもう一つ向こうに、子どもたちが、やがて20年後、さらにもっと先の50年後に、一体どんな大人として生きて行くのか、その時代に生きる子どもたちにどんな社会を残してやりたいのか、そういう社会に生きていく子どもたちには、どんな力をつけさせておかなければならないのか、と考えることも大変大切なことです。なぜなら、子どもたちが大人になったとき、その社会を担うのは、この子ら自身であって、そのときには、私たちは、もうそこにはいないかもしれないからです。未来の社会が、今よりもっと厳しいものになりそうならば、その厳しさに耐え、それを乗り越えて、さらに自分の幸せを掴み取ってくれる力を子どもたちが身に着けられるように助けてやれるのは、今しかないのではないのでしょうか。

時代とともに変わる人間形成のあり方

私たちが子どもだった、20年前、30年前、50年前に、私たちの親や学校の先生たちは、今の世の中がこんな風になっていることを、一体どれほど正確に予想できていたのでしょうか。日本の50年前といえばテレビや電話がやっと一般家庭に普及したばかり、戦災復興もほぼ終わり、経済発展と豊かな暮らしに向けて誰もが希望を抱いて一生懸命働き始めていた時代です。それから50年、その間に高度成長とその後のバブル崩壊、そして、世界の様相は一変し、さらには、今日、大人も子どももiPadやスマートフォンを携帯するようにな



出典元: インターネット写真素材【Aqua Forest】

るなど、いったい誰が予測していたでしょう。今の社会は、以前に比べて世界中の情報が一足飛びに多方向に同時に駆け巡る時代、これから50年後の世界は過去50年の間に起きたことに比べると、さらに一層、想像もできないほど大きな飛躍の変化を遂げることは確かです。大人が予測することもできない社会に向けて、私たちは、子どもたちに何を留意してやればよいのでしょうか。

少なくとも、これまでの知識詰め込み型の、教科書中心の競争教育は、どんな子にとっても、20年後の社会に通用する教育ではない、とだけは確実に言えます。

今なお日本の学校教育の主流を占めている画一斉授業という学校教育の形式は、明治以後の近代公教育として取り入れられたものです。公立学校が主として担う国民教育の原型は、フランス革命後、ナポレオン支配期のヨーロッパで始まりますが、同時に、それに先立つ産業革命の影響を強く受けていました。子どもたちは、19世紀初めの公教育の普及により、未成年労働からは解放されますが、学校で行われた読み書き算(3R)の基礎知識を教える教育は、基本的には、均質な基礎知識を持つ質の高い労働者を育成するためであったとも言えます。産業労働の場では、物事を批判的に問い直して上司の指示に疑問を述べたり、自分の選択的な意思で行動を決める人よりも、ひたすら黙々と自分に任された仕事を担う人が望まれたのは当然です。仮にその人が働けなくなっても誰か代わりになる人が見つかる、そういう人材を尽きることなく準備しておくのが、学校教育に課された課題でした。反対に、子どもを学校に通わせる親のほうも、学校で身につけた知識があれば、いずれ、労働の場を得、生活の糧を得られるわけですから、そういう画一的な学校であったとしても、これまでになかった機会として喜んで受け入れたことでしょう。

学校が、その時代その時代の産業構造にあわせて、そこで働く人材を養成するものであり、また、そういう学校に通う人たちにとっては、将来の生活の保障をえる場であったことは、ある程度まで真実であったといえます。

しかし、今、世界中の先進国で起きていることは、そういう、長い時代にわたって続いてきた学校と産業社会との関係が、今まさに崩れようとしていることを暗示しています。学校が、産業社会の歯車を育てていけば、リーダーも労働者も十分に満足だった、という時代は、今、本当に、終わろうとしているのです。

産業革命の3つの段階を経て

産業革命には3つの段階があったとよく言われます。第一次産業革命は、機械化による大量生産の開始です。この革命で、農耕牧畜社会で生計を立てていた人々が、農村を離れ、工場労働者として街に出て行き、急速な都市化が進み、それとともに人々の社会生活も大きく変貌します。労働者は、まさに、機械の一部のように工場で働き、子どもたちは、伝統的共同体のない都市の劣悪な環境で育ち始めます。第二次産業革命は、機械化の一層の発展で、機械生産のオートメーション化が進み、工場生産労働の機会が減少し始め、大半の労働者が働く場がサービス産業へと集中して言った時代です。第三次産業の人口比率が第一次、第二次産業に比べて著しく肥大していたことは、まだ私たちの記憶に新しいものです。けれども、この10年余りの間に進行している第三次産業革命と言われるものは、なんと、この第三次(サービス)産業から労働者を追い出すものなのです。コンピューター技術とインターネットの普及は、これまで人間が担ってきたサービスを肩代わりし始めています。私たちが、もはやいろいろな商品を店員のいる店からではなくネット注文・ネット購入できるようになっていること、手紙をポストにいれなくてもメールで直接通信できることなどが、その典型的な証拠といえるでしょう。

現に、今、多くの先進諸国で、若者の失業が増えています。それは、ただ金融危機後の経済不況だから、という一時期の現象ではなく、従来の雇用機会そのものの絶対数が減ってきていることと無関係ではありません。

脱産業化社会への離陸期

それでは、これは、悲観すべきことなのでしょうか。働く場がどんどんなくなり、暗い未来だけがやってくるのでしょうか。私は必ずしもそうであるとは思っていません。産業化時代、人々が毎日汗を流してあくせくと働き続けていた時代、社会にはいろいろな問題が徐々に積み重なってきました。地球環境の破壊、資源の枯渇、家庭生活の崩壊、人々の心身の健康への被害など、多くの問題が積み重なってきています。これからの時代、ものを生み出し消費するのではなく、これらの問題を解決するための新しい技術発展、よいものづくり、人々の心身の健康を回復させるための仕事は山ほどあります。

そもそも、産業革命という技術革新は、何のためのものだったのでしょうか。元来、人間は、自分たちの暮らし向きがよくなるように、人が汗を流してあくせく毎日働かなくても食べられるように技術を発展させてきたのではありませんか。人間の力を使わなくてもいろいろな物を作り流通させることができるのなら、それによって余力として得られた人間の力や時間は、本来の発展の目的、つまり、人間一人ひとりがもっと幸せに生きられるようにするために使われるべきものなのではないのでしょうか。

産業化時代に会社や工場に行って、起きている時間の大半を労働に費やしてきた人たちは、これからは子どもたち

が待つ家庭に帰ることができるのではないですか。今まで顧みることなかった近隣の人々と協働したり、地域の行事に参加することで、共感を養い、助け合って暮らせる社会を取り戻すことができるのではないのでしょうか。人間の働きには、賃金を受け取る労働だけではなく、収益のためにではなく行うたくさんの価値ある労働が含まれています。

今の日本のように、経済不況が長く続き、貧富の格差が広がってしまった社会からみると、こういう話は絵空事に聞こえるかもしれません。しかし、オランダや北欧の国々は、人間が働く時間を減少させ、国全体が生む利益を税金や社会保障費として集め、それを必要な人々に再配分することで、誰をも社会から落ちこぼれさせず、誰もが安心して無理なく働き、安全を保障された社会に向けて実際に制度を整えてきました。こうした国は、すでに、40年も前に、産業化社会から、脱産業化社会に離陸しているのです。

だからこそ、これらの国の社会では貧富の格差が小さく、労働時間当たりの生産性が高く、子どもや大人の生活への満足度が高く、金融危機によって不況がきて緊縮財政になっても、失業率が著しく増すわけでもなく、痛みを社会の人々が平等に分け合っ、一部の人たちだけが、人間としての尊厳を奪われた生活を強いられることがないのです。

差別をなくし、平等性を尊重した社会のこのような姿を見ていると、多くの国がやがて行き着くのは、こうした形式の社会制度しかあり得ないのではないかと思えてきます。現に、人々の幸福感が高く、犯罪率が低く、人々の社会への参加意識が高いのはそういう国ですし、そうでなく、今でも、競争的な産業型社会を続けている国では、人々の幸福感が低く、犯罪も多く、政治に対して背を向ける人たちがずっと多いのです。そういう社会では、子どもたちが大人になっても社会に貢献しようとはしないし、不満やストレスが社会不安の原因になることもすでにたくさんの例から分かってきています。社会を省みない人々の増大は民主社会の崩壊につながり、ストレスの多い社会が招く社会不安は、警察や警備の大きなコストを招きます。経済発展だけが人類社会の発展指標ではない、経済発展と人々の幸福度に派生の相関関係はないということがわかってきているのです。すでに、国連のいろいろな機関やOECDなどの国際組織が、さまざまな報告書で警告を発し、ビジョンを示しています。

こうした国際機関が、これからの学校教育に求めているのは、子どもたちの心身の健康を取り戻し、社会参加意識を培う場です。学制的な基礎知識ももちろん大切です。ですが、その基礎知識だけを朝から晩まで詰め込み、社会性にも情緒の発達にも無関心でいると、とんでもない大人が大量生産されてしまうのです。もっと大切なのは、子どもたちが、自分の頭で考えること(批判的思考)、受身にではなく創意工夫のあるアクティブな関わり方をしていくこと(創造性)、仲間と協力すること(協働)、ありとあらゆる情報を正しく受け止め、また、自分の方からも発信していくこと(コミュニケーション能力)、そして自立した市民として自分の意見をはっきり言え、同時に他者の意見に耳を傾け、共同する意欲を持つこと(シチズンシップ)などといった力です。

OECDなどの国際機関は、さらに、そういう社会的能力を子どもたちに身につけさせることを通して社会発展を目指すという目的にとって、学校は費用対効果が極めて高い場であるとすらいっています。その効果を高めるには、学校だけが独立でできるものではなく、保護者をはじめとする地域社会、そして、政策を決める行政責任者、国が、ともにこのビジョンに向けて協力し支えていくことが必要だとすら言っているのです。

イェナプラン教育は？

さて、はじめの問いに戻ります。

あなたは、自分の子どもや生徒に、将来どんな大人になってもらいたいと考えながら、その子に今関わっているのでしょうか。この子どもたちは、20年後、そして、それからさらにもっと先の時代に、どんな社会で、どんな風に社会と関わり、家庭を築いて生きていくのでしょうか。この子達が、自分の能力を発揮しながら社会に貢献できるようにするには、今、何をしておいてやらなくてはならないのでしょうか。

子どもを持つ親、学校の教員、子どもに関わる仕事をしている人であれば、どうか一度、このことをじっくり深く考えてみてください。もしかすると、答えはすでにこれを読んでおられる方一人ひとりの心の中にもう現れ始めているかもしれません。それならば、それをあなた一人だけのものとせず、仲間と共に共有してみてください。言葉にしてあらわすためには、考えをもっと具体的に深める必要があります。言葉にして他の人に伝えることで、あなたの覚悟も決まります。

そして何より大切なのは、子ども達の声に耳を傾けることです。現代の子どもたちは、大人である私たちが社会に希望を持たず憂いていることを知っています。それでも、まだこの先ずっと生きていかなければならない子どもたちには、嘆いてため息をついている暇などありません。うつむいている大人以上



Photo: リヒテルズ直子

に、大きくなったなら「こうしたい、こんな仕事につきたい、こんな大人になりたい」とたくさんの夢を心に持っています。そういう子ども達の夢に、あなたは耳を傾けていますか。子どものことを考えるのは大人である私たちの仕事だと思いませんか。大人の仕事とは、そうではなく、子どもたちが自分の夢をかなえられるように手伝ってやることです。ああしろ、こうしろと指示したり、子どもたちを「守って」やっているうちに、子どもたちの夢がしぼんではいませんか。

イエナプランがサークルを作って子ども一人ひとりの声を共有するのはこのためなのです。同世代を生きていく子どもたち同士が、今、これからも信頼して一緒に働いていく仲間を作ること、それを練習すること、それが、サークルの意味です。

そのサークルの中に教員が加わるのは、教え諭すためではなく、子どもたちが自分の心の中からの声を安心して言葉、それを他の子どもたちがなじったりからかったり無視したりせず心から真剣に受け止め、クラスの子どもたちの間に信頼関係を作り、なんでも話し合える仲間になるよう、失敗しながらも少しずつ進歩できるように助けるためなのです。

こうした毎日毎日の積み重ねが学校を変えるきっかけとなります。校長先生に不服を言ったり、政治家に責任を押し付けたりしても学校は一向に変わりません。私たちが、未来の世界はこうなってほしいと強く希望に満ちた信念を持ち、そこに向けて、今日の前にいる子どもたちに関わること、それが改革の第一歩です。



『教育先進国レポート オランダ入門編』DVD が完成しました！

『教育先進国レポート オランダ入門編 DVD 一子どもの幸福度世界一に迫る！』が、一般社団法人グローバル教育情報センターにより制作されました。

DVDの案内役はリヒテルズ直子さんです。自立心を育む環境の整った保育園、オランダの教育を支える教育サポートセンター、イエナプラン教育の小学校、国際交流の盛んな中高一貫校、リヒテルズ直子さんのインタビューなど、いま最先端の海外教育情報が盛りだくさんの貴重な資料です！

【DVDメニュー紹介】

<1>一人ひとりを大切にする教育(リヒテルズ直子氏によるセミナー映像)

- ・子どもの適性に合わせた学校教育
- ・自由度の高い教育
- ・魅力溢れる多様な教育の数々
- ・発展し続けるオランダ教育の今

<2>教育現場巡り(オランダの保育園・小学校・中学高校ほか)

- ・DAKグループ保育園
- ・教育サポートセンター
- ・ドクター・スハエプマン小学校
- ・ホフスタッド・リセウム

DVDの購入をご希望の方は、こちらのサイトにアクセスしてみてください。

【HP：一般社団法人グローバル教育情報センター http://geic.jp/articles/infomation/20130709_394】

オランダ研修を体験して～高原麗奈さんによるレポート～

2012年春季オランダ研修に参加された高原さんが、当時の様子を振り返るレポートと共に現在の活動について語って下さりました。どうぞお楽しみ下さい！

子ども達が主役の生きた学びの場～2012年春季オランダ研修より～

ロンドン大学大学院教育研究所 比較教育学専攻 修士課程
高原麗奈

1. はじめに

2008年の秋、大阪で行われたリヒテルズ直子さんの講演を拝聴したことをきっかけに初めてイエナプランを知った。子ども達の自主性、一人ひとりの個性、そして学びへの主体性を育むイエナプランの教育方法に、その時まで自身が抱いていた“教育”の概念を大きく飛び越えた学びがあることに衝撃を受けた瞬間だった。以来、イエナプラン校では「子ども達は教室でどのように学習しているのだろうか？」「先生はどのように教室で一人ひとりの子ども達に沿った教育を実践しているのだろうか？」という興味と疑問が膨らみ、また実際に体験したいという思いが強く募り今回の研修に参加させて頂いた。研修ではイエナプランのコンセプト、そして実践でのアプローチの仕方などワークショップを通して、イエナプランの教員養成をされている講師の方々から学ぶ機会を得た。また、実際にイエナプラン校を訪れ、コンセプトと実践が教育現場においてどのように活かされているかを知ることができた。

2. イエナプランのワークショップを通して

研修はオランダの首都アムステルダムより車で2時間程のエヒテンという場所にある、閑静で豊かな自然に囲まれた研修施設にて行われた。研修プログラムはイエナプランのコンセプトや教室での実践についてのワークショップ、またグループ活動など多岐に渡った。その中で特に印象深かった内容を紹介したい。まず一つ目が、研修初日に受けたイエナプランの学習環境を探索するプログラムである。これはイエナプラン校において用いられているインテリジェンスルームという、様々な特徴(数学倫理スマート、言語、内省、哲学、自然、クリエイティブ、空間視覚など)をもとに作られた部屋を訪れ、その部屋から何を感じ、またどんな考えが浮かぶのかを実際に経験するものであった。各部屋ではテーマに基づくデザインや工夫があしらわれ、その部屋ごとに受ける印象とそこに居て浮かぶアイデアが異なったものである事も感じた。またプレゼンテーションを受けた部屋もリビングルームと呼ばれ、私達がリラックスして研修を受けられるようなデザインや照明が施されていたことも印象的であった。イエナプランでは「環境そのものが子ども達を育てる」と言われているが、私たちが実際に感じたように、子ども達が安心して居心地良く過ごせ、ワクワクする気持ちを持てる雰囲気づくりが学校にも活かされているのではないかと感じた。また子ども達に教科書などの学習教材に限らず、“ほんもの”と触れ合える環境づくりがされているように思う。例えば自然と実際に触れ合うことや日常生活で目にするものが取り入れられていた。

二つ目に、「ストーリーラインアプローチ」の体験である。このプログラムは、身の回りの出来事や課題をテーマに物語を作っていくことを通して、客観的に考えていきながら、主体的な学びを育むものであった。はじめに登場人物の設定から始まり、名前や性格、そして家族や友だちのこと、住んでいる家などを実際に考え、登場人物の絵を書いたり、ミニチュアの家などを組み立てていく。グループに分かれて想像を巡らせながら、造り上げていく作業は童心に返ったような心はずむ時間であった。

その後、講師の方のファシリテーションにより物語は進んでいくが、印象的だったのが物語の進行のなかで常に私達参加者に質問を投げかけられていたことだった。質問の一例ではあるが、「もしこの仲の良い友だちと引越して離れることになったらどう感じる？」「引越先で新しい友達を作るにはどうしたらいい？」「渡り鳥はどのようなルートを辿って飛行し目的地に行くのだろうか？」

など、さまざまな質問を投げかけられる度に、自身がまるで物語の主人公になったように真剣に考え、いつの間にか自分たちで創っている物語の中に引き込まれているような感情を抱いていた。また、このように物語の中で客観的に題材を取り上げてはいるが、子ども達が実際に物語をつくっていく際には、その題材が生活と強く結びついているため、まるで自分自身のことのように物語の中の問題に向き合っていくのではないかと感じた。また、このストーリーラインアプローチの特徴として、科目をまたがった学習が進められていることである。国語、算数、理科、社会など、一つの



Photo:高原麗奈

【ユーモアを交えながら、終始和やかな雰囲気での授業をしてくださったイエナプラン講師のフレイクさん。】

プログラムを終えるころには、子ども達が持つ様々な知識を科目にとどまらずに実際に応用する方法を学ぶことができているのではないかと感じた。「Education is actual life」と講師の方が研修を通して繰り返しおっしゃっていたが、教育は実際の生活と直結していること、頭で覚えるだけではなく実際に感じることが大事であり、それにより、子ども達の「もっと知りたい」といった興味に繋がるのではと思った時間であった。

三つ目に、研修で特に印象深く心に残ったことは、草創期よりイエナプランの発展・普及に尽力されてこられたアド・ブースさんのお話を伺ったことである。お歳を召された今でもオランダ政府の教育審議会のアドバイザーとしてご活躍され、多忙の時間をぬって私たちがいる研修施設まで赴いていただき、イエナプランの歴史や教育現場における数々の試みなどを紹介して頂いた。今でこそオランダで広く支持され、実践が取り入れられてきているが、イエナプラン教育の試みの当初は様々なご苦労があったこと、また現場にいらっしゃる先生方が数知れない議論と努力を重ねてこられたこと、そして初めてイエナプランが当時のオランダ政府・文部大臣に高く評価を受けた時のことなど、いきいきと話して下さったことに非常に感銘を受けた。またオランダにイエナプランを紹介したスース・フロイデンタール女史の人柄や彼女とのやり取りを、当時を振り返り、まるで昨日のことのように鮮明に語って下さったことも貴重な時間となった。アド・ブースさんのお話を通し、このイエナプランは、教育現場に携わる方々が幾多の議論と一つ一つ実践の試みを重ねられてきたからこそ発展を遂げてきたと知ることができた。

3. 学校視察を通して

学校訪問ではイエナプラン校を2校見学させていただいた。一校目のSint Paulus小学校では、校長先生に学校の説明をしていただいた後、午前と午後各2クラスずつ教室に入り見学することができた。

4～5歳の子ども達からなるクラスでは、遊戯の時間であったが先生以外にもう一人、教室に大人の方がいらしゃった。お話を伺うと、児童のおばあさまであり、教員経験があるのでボランティアとして週に一日、学校で子ども達と過ごされているとおっしゃっていた。クラスの担任先生も、来て下さることで様々な教員経験を教えてもらえ何より子ども達が身近に触れ合える大人が増えたことを喜び、一緒に遊んだり分からないことを聞いたりできる存在がいることで安心感が増しているとおっしゃっていた。このように保護者や地域の方が子ども達が通う学校に参加するのはとても身近なことなんだと感じた。

6～8歳の生徒からなる中学年クラスでは、読み書きの授業が行われていた。異年齢の子ども達で構成されている5人ほどのグループを、ひと班ずつ先生が前で教えていた。他のグループは、待っている間、それぞれの課題を進めていて、時々、そのグループ内で質問をしたり教えあったりする様子が見受けられた。全体の印象では、課題をする間は黙々と集中しており、時々話しながら声が大きく騒々しくなりそうな時は子ども達同士で注意を促していたのも印象的であった。授業時間ではそれぞれが静かに集中している一方、休み時間になると元気いっぱい歓声を上げて、校庭を走り回っていた子ども達の姿をみると、とても微笑ましく感じた。



Photo:高原麗奈

写真2:保護者も教室に参加。



Photo:高原麗奈

写真3:班に分かれて学習している様子。

このSint Paulus小学校はイエナプランのコンセプトを盛り込み校舎が設計され建てられたこともあるのか、全体的に明るく開かれた印象を感じた。

まず子ども達が教室以外で他のクラスの子と交流しやすいようにデザインされていたり、保護者がお茶を飲みながら気軽に先生や他の保護者と懇談しやすいスペースが設けられていた。オランダでは保護者が教育や学校運営に参加しやすい雰囲気があるということをもっと肌で感じることができた。

2校目はJena XLという中学校を訪れた。ガラス張りの日光がよく差し込む校舎で私たちを迎え入れてくれたのは、二人の女子生徒であった。学校には9つほどのユニークな委員会(“持続可能な社会をつくる委員会”など)があり、彼女達は訪問者を案内する委員会であることを教えてくれた。一週間の時間割りの例を説明してくれたり、各教室を

案内してくれたり、また私たちの為に昼食を用意してくれたり、その日の見学プログラム全般を彼女達が担ってくれたことに非常に感銘を受けた。ここでも子ども達が学校の主役であること、そして自主的に学校に関わる姿を垣間見れた気がした。見学させて頂いたあるクラスでは、サークル形式で座り、あるテーマを言葉と体で演技のように表現する授業であった。手を上げた希望者が交代にパフォーマンスを披露するのだが、全体的に生徒が臆する様子なく積極的に手を上げ、楽しんで表現していたことが印象的であった。このように学校で自分自身を表現する場が多くあり、またそれを一人ひとりの個性として認知し肯定される環境があることも、子ども達の自主性や個性を育む大切なきっかけになるのではないかと感じた。



Photo:高原麗奈

写真4:教室を出て廊下にあたるホールには様々な工夫



Photo:高原麗奈

写真5:保護者の憩いスペース。子ども達が自習をする姿も

4. 研修全体を通して

「あなたはどう感じましたか?」「どうしてだと思いますか?」「あなたが気づいたことを今後、何に活かすことができると思いますか?」

イエナプラン研修の全日程を振り返り、特に印象深かったことは、講師の方から繰り返し受けた質問の数々であった。自分自身の意見を何度も聞かれることを通し、今までは、自分自身で考えるプロセスよりも学んできたことはこうだからと“正解”を探そうとしてしまっていた自分に気がついた。そしてともすれば、子ども達にも同じように“正解”を求めようとしてきたのではないかと、研修を通して自分自身の姿勢を今一度見直すことができた。思い込んでいたものが本当にそうなのか?、違う側面もあるのではないかと、問いを繰り返すことによって、積み上げていた概念を見直し、自分で考え、検証し、発見するプロセスの大切さをイエナプランの研修を通し体感できた。

私自身が感じたこの“問うこと”、“自分で考え、発見すること”のプロセスが、イエナプラン教育では実践の中で大切にされていることを見る事ができた。そして、このプロセスが育む自主的な学びは、子ども達の学ぶ喜びにもつながり、さらには、子ども達の個性に沿った学びの実践をも可能にするのではないかと、学ぶことができたように思う。

今後、今回の研修で学んだことや学校見学で出会った子ども達の学ぶ姿から感じたことを、少しでも教育現場において、また子ども達と接するなかで活かしていきたいと思う。特に、私自身、子ども達の興味の芽に気づくこと、また、この考えるプロセスを大切にしたい学び・子ども達が問いに触れやすい、気軽に質問しやすい関係性づくりに努めていきたいと強く感じた。



写真6:読書の時間。
教室にあるロフトスペースでくつろぎながら。



写真7:中学年クラスの様子。
先生が一人ひとりの子ども達を順番に見て回る。

2013年夏～研修後1年経って今、思うこと～

オランダでの研修を終えた後、イギリスで経験した忘れられない授業がある。

クラスメートが副校長を務めるロンドン郊外の中高一貫の男子校を訪れる機会があった。その日は朝から4クラスほど見学させていただく予定となっており、1クラス目のYear9(13～14歳クラス)の社会科の授業を見学した時のことである。

その授業では第二次世界大戦がテーマとして取り上げられ、1枚の写真がプロジェクターのスクリーンに投影されていた。その写真は、1945年に広島に投下された原子力爆弾であった。この写真を前に「広島に原爆が投下されたのは是か、非か。」をテーマとし話しあう授業であった。

その日は私とシンガポール人の友人と二人で伺ったものの、生徒達は見学者の私が日本から来ていることを知るよしもなく話し合いが始まった。このようなテーマで議論が進んでいくなかで、日本で生まれ育った者としていくつかの言葉を発したい気持ちを抑え、もどかしさとともに授業の行く末を見守った。

「罪のない市民が犠牲になってはならなかった。なので、投下するべきではなかった。」
「投下されたのも一理ある。なぜならばアジア諸国において日本の植民地化が進行するのを防ぐことになったからだ。」

生徒たちそれぞれが事前に集めた情報をもとに、このような議論が次々と目の前で繰り広げられていった。そして授業の最後に、教師の方から「この場で、是か、非か、結論を出す事は出来ないだろう。ただ、こうして自分達をその立場に置き、どう思うのか、なぜそう思うのかを考えることが重要である」という言葉とともに締めくくられた。14才の生徒達がさまざまな意見を交える姿を前に、取り上げられたテーマと議論の内容もさることながら、私は言葉に言い表しがたい無力感をいだいた。日本の歴史の授業を思い浮かべると、教科書のなか数行に要約された文章を目になぞらえることで史実を覚え、歴史を学んだ気になっていた私自身の記憶がよみがえったからである。同時に、日本の今の教育システムを考えながら様々な疑問が浮かんだ。

「果たして、日本の子ども達は、このような場に居合わせた時にどのような気持ちをいだくのだろう？」
「違和感や自分達の主張を、どれくらい伝えることができるだろう？そしてどのような話し合いが行われるのだろうか。」

生徒たちのディスカッションを前に、オランダ・イエナプラン研修で気づきを得た、『子ども達自らが考え、検証し、発見する主体的な学び』がいかに大切であるかをあらためて感じた。イエナプランの発展に尽力したスース・フロイデンタールと面識があった当時のオランダ・教育文化科学大臣のケメナーデは「言挙げする市民を育てる」と言葉を残したそうだ(リヒテルズ, 2012)。将来を担う子ども達一人ひとりが、社会の作り手として声を上げることのできる民主的な国家を創りたいとの願いがこめられているのだろう。この言葉を思い出しながら、教育において大切なことは何であろうかと、あらためて一石を投げられた思いがした。

現在、私は大阪にある箕面こどもの森学園というオルタナティブスクールにスタッフとして携わせて頂いている。この学園では、学習計画を子ども達自らで立てていたり、全校集会により学校のルールが決められていたり子ども達自身が学びの担い手であると、子ども達の自主性を重んじることが大切にされている。また毎朝あるハッピータイムという、日々の出来事や思う事をみんなで輪になり自由に話す時間を設けている。高学年・低学年クラスの異年齢学級で編成されていることもイエナプランに通じるところがある。こどもの森学園で出逢った子ども達のエピソードのなかで、私がイギリスの学校で感じた不安が一筋の希望に変わる出来事があったのでここで紹介したい。

～大切なのは、けんかをしたあとに気がつくこと～

テーマ学習で、平和と憲法について学んでいたときのことで。

第二次世界大戦でということがあったのか、大日本帝国憲法と日本国憲法のちがいを学習し、みんなが充実した学校生活をおくるために、どういう憲法が必要だと思うか、低学年と高学年に分かれて話しあっています。低学年には、難しいテーマかと思いましたが、実際に取り組んでみると、全くそんなことはありませんでした。自分の目線から、疑問に思っていること、平和についての考えなど、次から次へと飛び出し、とても中身の濃い話しあいになりました。

自分の経験したつらかった過去を一人の子が話すと、「うちも同じようなことがあった」「ぼくだって」と何人かが、自分の経験を話しました。みんなが、そんなつらい経験をしなくてもすむような憲法にしよう！ということになりました。

話し合っていくうちに、「けんかをしない」という意見が出てきました。このテーマ学習では、平和とは何かを子ども達に投げかけてきました。対立がないことが、平和なのではない。対立は、いつでも、だれとでも起こりうること。そこからどうしていくのか？それが大切。高学年の子どもたちは、そのことをよくわかっていますが、低学年の子どもたちには、難しいのかも…と思っていたとき、ある女の子がこう言いました。

「けんかってさあ、けんかをしないってことが大切なんじゃなくて、けんかをした後で気がつくってことが大切なんじゃない？けんかはいつでも起きるし、けんかにならないようにしようって、がまんしたり、おかしいと思う事をおかしいと言えないことは、もっとよくないと思う。」

「そうや、そうや。」とうなづく子どもたち。

「気がつくってさあ、何に気がついたらいいの？」

「それは…、自分の心。どこが悪かったのかとか。後は相手の気持ち。」

(NPO法人箕面こどもの森学園, 2012)

教え込まれるのではなくとも、子ども達みずからが当事者の立場になり考え話しあうことで、相手の気持ちを理解することや解決策を探し求める学びが育まれることを感じた。

“教育”とは何なのか、そして“教育”とは誰のためのものなのか。

そんな問いを抱える私に、目の前にいる子ども達が確信を持たせてくれる瞬間であった。

【参考文献】

NPO法人箕面こどもの森学園, こんな学校に出会いたかった!, 2012年

リヒテルズ直子(2012, Nov. 2), オランダ・イエナプランの母スース・フロイデンタールと見識があった当時の教育文化科学大臣のケメナーデは、「言挙げする市民を育てる」と言ったそうだ。[Twitter post], Retrieved from <https://twitter.com/Naokoinholland/status/264339360164507649> [2013-7-15]



【リヒテルズ直子さんへのご質問・ニュースレターへの感想】を募集します。

オランダの教育・社会について、リヒテルズさんに聞いてみたいことはありませんか？ご質問・感想をお送り頂く際は、件名に「質問箱」「サークル対話実践談」とお書きの上 info@japanjenaplan.org までお送り下さい。

※紙面の都合上、頂いたご報告やご質問をこちらで編集することがあることをご了承下さい。皆さまからのお便りをお待ちしております。

【会員特集】～イエナプラン教育と出会って～



イエナプラン教育に共感し、メーリングリストやFacebook、講演会に参加しているイエナな皆様！『日本の教育をより良くしていきたい』と同じ思いで集まった会員の方々が、どのような活動をされているかを特集をさせていただきます。

住んでいる場所は離れていても、時には疲れてしまうような事があっても、様々な現場でチャレンジしている仲間がいます。今回は長野県で活躍されている鈴木早苗さんにイエナとの出会いを語って頂きました。

私もイエナにチャレンジ！！～ニュースレターに励まされています～

長野県小学校常勤講師 鈴木早苗

【イエナプラン教育との出会い】

私がメーリングリストでリヒテルズ直子さんに出会ったのは10年ほど前。それまでは千葉の古山明男さんの元でフリースクールのスタッフをしてました。その後、長野県に引っ越して情報も入りにくくなっていました。そんな時、オランダから届く日本の教育にも海外の教育にも詳しいリヒテルズさんのメールに、引きつけられました。私は議論に加われるほどの力量はないので、影ながらリヒテルズさんの『オランダの教育』が出版されることを応援していました。その著書を手にしてオランダの教育、そしてイエナプランへ惹かれていきました。

学校に居場所のない子どもたち、障害のある子どもたちと関わりながら、私なりに模索してきた教育観・子ども観のお手本がここにある。学校をもっと子どもたちが安心して、生き生きと学べる場にしたい。とにかく、『私が学びたい、リヒテルズさんにお会いしたい。たくさんの方の困難を抱えている子どもたちと関わる自信とヒントを得たい。』そんな思いでした。

【心地よい生活のリズムはイエナの的！？】

しかし、小学校の講師として特別支援学級の担任をしているうちに、私はうつ状態になりました。薬で心のうつは回復したものの、身体症状は悪化して退職に追い込まれました。それでも子どもに関わることは続けたくて、退職半年後から、一日2時間だけ小学校のTTをさせてもらいました。

うつで何もしたくない、体も痛くて動けない。だからといって、3日寝ていると気持ちまで落ちていく。そんな時に気がついたのは、療養中でも、最低限の家事、癒やし、家族や本との対話など、リズムをつけた方が結果的に調子が良いことです。これって、イエナの基本活動「対話、遊び、仕事、催し」のリズムに通じている！？もちろんすぐ療養バージョンですけど。

いつだったかのニュースレターに、『自分の日常生活をイエナの基本活動のリズムで行う大切さ』が書いてあり、「ああ、私もイエナにチャレンジしているんだ！」と感じ、元気がわいてきました。そうは言っても、自分の生活リズムを探り、整えて維持するのは、とっても難しい。うまくいきませんが、これもイエナの実践の一つ、思えるようになりました。

発症して7年目。ようやく9割回復で、今年4月から常勤講師に復活しました。今度こそ仕事でつぶれないようにと、気をつけていますが、もう何度も赤信号一步手前の状態になり、休養しながらごまかしています。早く、日本もワークシェアできるようにしてほしい！！

【なぜ、イエナに惹かれたのか】

この原稿を考えていて、気がつきました。私の生き方・考え方に合っているなあ、20の原則など、すうっと心にしみていく感じ。そして、私の小学校時代の大切にしている体験と、イエナが重なるじゃないか！？と。

■私の子ども時代■

私は長野県の山間部の農家に生まれました。とにかく楽しく学び、遊びまくった毎日。そんな中、自宅で飼っ

ていた山羊が子どもを産み、毎年売られていくのを見て、小4の春、「学級で飼ってみたいか」と持ちかけてみました。クラスメートに「えさは？」「小屋は？」「冬は？」と現実的な課題をぶつけられ困っていると、担任が「でも、みんなでやったらなんとかなるんじゃない？」とバックアップしてくれて、みんな急に大賛成！！そして、山羊が学校生活の中心となりました。

昭和50年代、生活单元だったのでしょか？みんなで、考えて小屋を作りました。算数の苦手な子が、大事なことに気がつきました。「そんなに細かく計算したってさ、屋根にタキロンをぴったり並べたら、雨漏りするよ。重ねないと…」って。みんなが、自分の得意なことで活躍しました。山羊は、残念ながら秋に死んでしまいましたが、それから次のテーマがどんどん出てきて、田んぼも山も教室になりました。

担任は、よく話し合いをさせる方でした。多数決で終わりではなく、反対の人も納得するまで話し合いをしました。できるだけ子どもたちに任せられました。

私も仲間も、「私たちは、野山を駆けまわって、山羊を飼って、稲を作って、大事なことを教わった。それが、今の生きる土台になっている！」と実感していました。教科書通りじゃないけれど、国語も算数も理科も、社会や生活に密着した学習はしっかり残っています。『将来、この村に残るのか、東京に出るのか』も、熱く語り合いました。『自分はどう生きるのか』という大事なことを学んでいました。イエナのワールドオリエンテーションに通じる部分があるのではないのでしょうか？

小学校時代の全てが素晴らしかったわけではないですが、その生きることに直結した体験的な学習は、子どもに必要なんだと信じてきました。その裏付けが、確かな保証が、私にとってはイエナプランとの出会ったのです。

【私の小さな取り組み】

■複式学級のある小規模小学校で■

うつ状態のひどいとき、非常勤で勤めた小学校は、児童数が減って複式学級に移行する時期でした。職員は、「上の学年の時は、しっかりしているのに、翌年下の学年になると甘えん坊になる。幼くなってる！？」と、複式のマイナス面に気をもんでいました。正規職員も減って、仕事も半端じゃない状態の中、私は、イエナプランを紹介しました。「わざわざ複式学級にしている教育がある。複式のプラス面を生かしませんか？」と。非常勤だから積極的に自分で実践はできないし、余力がないので、じわじわ作戦で気長に…。初めは興味を持たなかった先生たちも、少しずつ変わってきました。

そして、2～3年経ち、職員から「複式で、子どもたちは上の立場と下の立場を繰り返しながら、一人一人確かに成長している！」とプラスの発言が出てきました。「この学校は、全職員で全校を観て、地域の人にも参加してもらって、全校で一緒に学ぶことが必須。いや、地域には自分たちから出て行かなきゃいけないよね。普通の学校と同じじゃだめ。工夫しよう。学校改革プロジェクト！」と、学校自体も盛り上がってきました。

ある担任は、2学年を同じ教室で教えたり、違う内容でも発表し合ったり、いろいろ工夫しました。副担任の私は「イエナの教室みたい！」とワクワクしながら、バックアップ。しかし、その先生は翌年異動してしまいました。私はまだ授業に出ることに精一杯で、他学級に広められなかったため、その先生のマンパワーで終わってしまい、悔しい思いでした。

次に組んだ担任は、2学年一緒の教科学習を断念しました。子どもも、イエナでいう自分の仕事に集中できる状態に育っていなかったので無理がありました。「受け身で生活していると、自分の学習に自分から取り組むって、難しいんだなあ。」と実感。でも、日常生活、総合や体育、音楽、図工は2学年一緒。これは、とっても素敵でした。異学年の良さをいろいろ発見でき、職員間でも共有することができました。

もっと、この学校に長く関わりたいかったのですが、4年間で次の学校に異動になりました(この直前に、長野県北部地震がおき被災)。

日本中に複式学級の学校はたくさんあり、皆どこも試行錯誤しながら教育方法を模索していますが、なかなか情報の共有ができてないのが実情のようです。

しかし、一斉授業を変えていく実践の場が、小規模校、複式学級にあるのではないかと、イエナを日本バージョンにする一つの試みもできるのでは？と、私は強く感じています。そんな現場にいらっしゃる方、是非、声を上げてみてください。

■震災後の小規模校小学校で特別支援■

異動した小学校は自宅の目の前で、震災後避難所になっていてマイナスの状態からスタート。ちょうど統合

にもあたり、1年間は、とにかく震災からの復旧と少しずつ通常生活に戻していくことで精一杯でした。学校も、子どもたちも、自分の生活も。それで、前の学校のように、イエナを紹介することはなかなかできていません。

ここでの仕事は、知的障害学級の子どもの付き添い。今年は、その子の担任。そして、もう一人の情障学級の子どもも合わせ、二人と格闘の日々(格闘と書くところ、イエナ的ではないですね…。反省)です。二人のペースと学校の日課をどう合わせるか、一見遊んでばかりでわがままに見える二人を、どうやって学校に位置づけるか、認めてもらえるか等、課題がいっぱいです。

■特別支援学級での取り組み■

『教室はリビングルーム』とにかく、安心して自分が表現できる、困ったら逃げ込める場所にはなりました。創作活動、ごっこ遊びが広がりすぎて、机に向かえないのが難点です。

『遊び・学習』遊びは二人の重要な仕事。そして、遊びの中に二人の学びがいっぱい！遊びながら学べるカードやパズル、積み木、カルタ、ブロック、ドミノなど、お気に入りがたくさんあります。我が『オニミチ』大好き。先日は、オニと友だちバージョンにルールを変更していました。

『探検隊(生活単元)』というワールドオリエンテーションをイメージしながらの活動も行っています。好きなことからならどンドン興味が広がり、昆虫を調べたり、植物と遊びながら観察したり、お料理したり。この二人はとにかく体験したことは、身についていく、頭に入っていくので、そんな活動の成果を他の子どもたちにも先生方にも見てもらっています。差し障りがなければ、他の学年の活動にも、便乗してお互いに学び合えるようにしています。



Photo: 鈴木早苗



Photo: 鈴木早苗

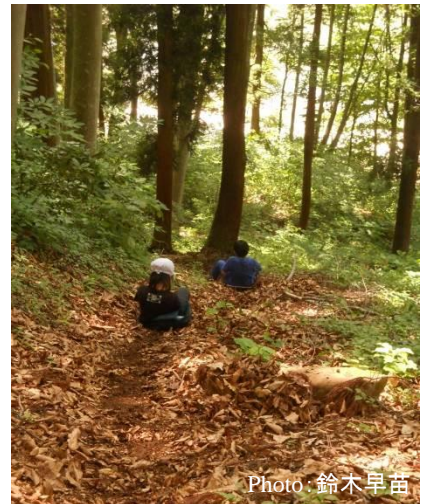


Photo: 鈴木早苗

大変な毎日ですが、日々、二人からとても大事なことを気づかせてもらっています。

一人は、一つの活動をやり出したら満足するまでやめられません。子どもが満足できるように私が一緒にサポートしていると、ある時点で終わり次へと、自然に活動のリズムができてきました。机に向かって書く時間、体を動かす時間、おしゃべりの時間、ごっこ遊びの時間、その子の時間のまとまりとリズムが生まれる！子どもってすごい！なんだか、感動しました。

一人は、なかなか今日の予定を書かず、やぶいたり×したり。どうしてかな？イエナだったら？と思いながら、子どもの視点で考えてみました。すると「ぼくのやりたいことがない」が浮かび、子どもにとって学校の時間割に魅力がないんだ！と気がつきました。そこで、好きな活動がいつできるかわかるようにアレンジしてみました。すると、にっこり。書くのはやっぱり苦手だけど、私が予定を書くところを見て、「貸して」と鉛筆を持って書き込む姿も見られるようになりました。

【終わりに】

これって、イエナと関係ある？と言われそうな、つたない活動を、あれこれ書いてしまいました。きっと、皆さんはもっとイエナを学んで日々の活動に生かされていると思います。ニュースレターに載せてもらうなんて、思ってもいませんでした。それでも、書いてみようと思いました。それは、なかなか東京にも出られず皆さんと一緒に学ぶ機会が少ない私ですが、ニュースレターのおかげで、講演会やワークショップ、オランダの研修にちょっとだけ参加したような気持ちになれたり、皆さんとつながっていると感じられたりして、元気と勇気ももらっていることを、皆さんにお伝えしたかったからです。事務局のみなさん、ありがとうございます！

これから、ますます、ニュースレターで皆さんとお会いできることを楽しみにしています。

『イエナプラン教育をもっと学びたい！』～想いが実現につながった勉強会～

6月・7月、大阪・浦安・東京でイエナプラン教育に関する勉強会が開催されました。イエナプラン教育が徐々に知られるようになり、人々の関心が高まっていく中で、『もっと学びたい』という人々の想いが勉強会の実現につながりました。今回は大阪での勉強会の立ち上げについて、東稔治義さんに詳細を報告して頂きました。今後の展開が楽しみです！（※浦安と東京の勉強会は以下、簡単にご紹介させていただきます。）

【イエナカフェ@浦安(イエナプラン教育協会千葉支部 山田さんから報告頂きました。)]

3年前から原則月イチ浦安で開催してきましたが、最近江東区、亀戸と都内が続く、6月22日は久しぶりの浦安開催。8名＋赤ちゃん2人参加。「もしイエナプラン校ができれば！」というテーマで「システム思考」にトライしてみました。ファシリテーターは喜井さん。おたるネットの古山さんや図書館研究をしている方、また街づくりの会から参加した方と多彩な顔ぶれ、様々な意見や考えが出て、面白かったのですが、それをどう生かすか？現在募集中の浦安市協働事業に小学校統廃合の跡地利用案として提案してみようと教育委員会と協働事業推進課との話し合いの場に臨みましたが、なかなか難しそうです。現在作戦を練っているところです。



【東京勉強会(Facebookの協会ページに詳細報告有)]

7月13日(土)、青山のオヤコサロン【ボヌール ド サクラ】で勉強会が行われました。ファシリテーターは奥村天志さん。10名の参加がありました。遊びながら交流を深め、イエナプランの基礎知識を共有しました。今後もこのような活動を継続したく、そのために何が出来るか？どうやって活動を発展させていくか？皆でサークルになって考えたあつという間の3時間でした。今後上記議論をFacebook上でも展開していく事になりました。

関西に「イエナプラン教育」の広がりを！—大阪学習会の報告—

報告：東稔治義

1. 始まりは必然

教育現場の超多忙さに流され、このままでは自分が「枯れて」しまうと感じていた頃、何かを求めようとして「オルタナティブ教育」の本を読み始めた。そして出会ったのが「イエナプラン教育」だった。リヒテルズ直子さんの著書を一読して「これだ！」と思った。目指すものが明確に言葉になっていて、しかも方法論がそれを実現するためによく練られているのに感動した。

しかし、本だけではよくわからない。そんな時に、4月の東京でリヒテルズさんのワークショップを知った。イエナプランのワークショップはオープンで、私のような初参加者もすんなりと受け入れてくれる寛容さがあった。私はリヒテルズさんに直撃で話しかけ、自分の悩みを一方向的に語った。リヒテルズさんは共感して聞いてくださり、励ましの言葉と何人かの繋がるべき人を紹介してくださいました。またリヒテルズさんの「私がいなくても各地で学習会が開けるようになってほしい」という言葉が、とても印象深く私の中に残った。

会員になりニュースレターなどさまざまな資料を読む中で、もっと具体的にイエナプラン教育を知りたいという要求が高まってきた。しかし、関西でイエナプラン教育について語れる人を知らない。そこでfacebookグループに、「大阪で学習会を開きたい」と書き込んだ。すぐに事務局の中川綾さんがファシリテーターに立候補してくださいました。できるだけ現場の先生が参加できる条件で開催したかったので、7月の土曜日に設定した。それが5月の下旬のことだった。

2. 学習会の準備開始！

肝心なことは、学習会の内容だった。まずはイエナプラン教育の理念や実践法、全体像を学ぶことから始めた方がよいらろうと考えた。しかも、講義だけでなく、実際に体や頭を動かして、イエナプランを体感できるものがある。これに関してはファシリテーターの中川綾さんが、骨格のしっかりしたプログラムを組んでくれた。

学習会へ向けての話し合いは、facebookのグループでオープンに進めた。その方が、いろんな方のアイデアや思いを取り入れたものにできると考えたからである。リヒテルズさんからは、関西在住のイエナプラン教育に詳しい方を教えていただいた。知らなかっただけでちゃんといふことを知り、今後に希望が湧いてきた。

3. いよいよ、参加受付開始！

学習会の内容も確定し、6月9日(日)、参加者募集を始めた。予想に反して反応が早く、その日のうちに定員

の半分が埋まった。そしてあっという間に、4日後には定員15名が埋まってしまったのである。

地域は大阪以外に、和歌山、奈良、京都、三重、兵庫、愛知と関西とその周辺に広がっていた。特に、大学生の参加は、若い世代への広がりを感じさせてくれた。改めて、関西でのイェナプラン教育への関心の広がり、学ぶ意欲の高さを感じた。

また、当日までや当日の実務を、参加者で自主的に分担し合った。それが参加する人も一緒に学習会を作り上げていくという意識に繋がったように思う。

4. じっくりと学べた大阪学習会

7月6日(土)の学習会当日、参加者は14名だった。しかも、運良く1時間の延長を申し込むことができた。おかげでゆとりをもって学習を進めることができた。

学習会では中川綾さんお得意の「シャベリカ」を使っての自己紹介から始まった。そして、イェナプラン教育の基本について、中川さんからの講義。「8つのコンセプト」「20の原則」「根幹グループ」「リズムカルな学び」など……。

私や参加者にとって、何よりも一番具体的でわかりやすく興味を引いたのは、オランダの実際のイェナプラン校の映像だった。

学校は「小さな社会」であり、外の社会と繋がっていて、そこに入っていくための一つの練習の場でもある。だからこそ、学校は「居心地のいい『自分たち』の場」であり、「失敗してもいい場所」でなければならない。それが「教室はリビングルーム」という言葉に込められている意味とわかった。

そのためには、教師は「上から一方的に教え込む存在」ではなく、自らも学び手として成長しながら、学びをサポートしていく存在として、子ども達の前に立ち現れなくてはならない。

教室には多様な学習段階に合わせた多くの学習教材や学習ゲームがそろえられており、子どもは自分の段階に合わせて、教材を選び、学習を進めていく。教師が教室を巡回するルートは決まっており、必ず全員の机を回るの、子どもは静かに待っている。このような「学習環境の設定」がしっかりとされているのだ。リヒテルズさんの言葉を借りれば「イェナプラン校の教師が日本の教師と比べて、特に優れているわけではない。システムがしっかりとできあがっているから、教育力を発揮できる」のである。

学習の進度は子ども自身が1週間単位で、計画表に書き込んで決め、クリアしたら自分でチェックをつけていく。そして、金曜日に必ず学習の進み具合について、教師がチェックをし、アドバイスを。そうやって、子どもの学習の進度に大きな差が出ないようにするのが、教師の仕事であり、力量であると捉えられているということだった。



Photo: 東稔治義

イェナプラン校の教室のレイアウトを説明する中川さん



Photo: 東稔治義

これがイェナプラン校の職員室！

5. 職員室の椅子も、サークル状態！

イェナプラン校の職員室の椅子の配置も、丸くサークル状になっているのには驚いた。日本の職員会議は伝達場所であり、決議機関ではない。そもそも、決定権が校長にしかないの、意見を言ったところでむなし。イェナプラン校では校長がファシリテーター役になり、会議を進めるという。校長にも高い力量が求められるが、教師も対話し、議論しながら決めていけば、決議に責任を持つし、この方が教育にはふさわしいと思った。

最後に、今回の学習会の狙いの一つ、「イェナプラン教育を体感する」を実現するため、ワークショップとして「今後学びたいこと」というテーマで各自が項目をポストイットに書いていき、模造紙に貼るという作業を行った。

全て出揃った後、ファシリテーターの中川さんが、カテゴリーごとに分けて見出しをつけるよう指示した。しばらくはみんな突っ立ったままで動かなかったが、そのうち誰ともなく、「これはこっちの方がいいじゃない?」「これは〇〇〇って内容でまとまるよな」と相談が始まり、作業スペースが狭いことに気づいた人が机を出してきて、新しい模造紙にポストイットの一部を移動させたり……。そうこうしているうちに、全体が幅広い内容にカテゴリー分けされた。

作業が終わった後、中川さんから「どんな気持ちになりましたか?」という問いかけがあった。参加者からは「何か放り出された感じ」、「人の意見を勝手に動かしていいのか戸惑った」、「もう1枚模造紙を出してくれたので、作業がしやすくなった」という声が出た。そう、この「放り出されて、自分から他人に働きかけないと、何も動かない状況」、その時に発揮されるのが、その人の自主性であり、他人と繋がろうとする働きかけであり、意見

が合わないときの対話の力である。これがイエナプランを体感するということなのだろう。指導者自身がそういう力をつけていくことが、イエナプラン教育を実践する上で大切なことだと感じた。



Photo: 東稔治義

さあ、どうやってカテゴリー分けしよう...



Photo: 東稔治義

こんな感じでアバウトに貼り付けました



Photo: 東稔治義

作業しにくいから、移動させよう！



Photo: 東稔治義

どんどんカテゴリーに分かれていきます

6.そして、関西支部の立ち上げへ

出された意見の中で一番多かったのは、「日本の学校にイエナプラン教育をどのように取り入れて行くか」だった。これについては、すぐに答えの出るものではない。そこでまず関西支部を立ち上げ、facebookにグループを作り、情報交換をしていくことから始めることになった。現在37名の方が参加している。今後、関西でイエナプラン教育について学び合う拠点の一つになるよう、第2回目の学習会も視野に入れながら取り組んでいきたいと考えている。

学習会が終わったら、そのまま懇親会に突入。今度は膝をつき合わせての熱い議論が続いた。大学生の方は採用試験前にもかかわらず参加してくれた。また、大阪の教師に対する管理・統制の激しさなども知らなかった方に理解してもらえ、みんなでこれからの教育をどう変えていくか、という議論ができたこともよかったと思っている。

7. まとめとして

最後に、中川さんが紹介したとある小学校の教室の様子から、私が感じたイエナプラン教育の導入のヒントを書きたい。それは、荒れた学級を引き継ぎ、1学期の終わりには静かに小グループで学習ができるまでになった実践だった。初めはコラボレーションゲームをたくさんやって、子ども達に遊びを通して協力し合うことを指導し、そして、1対1の対話の練習から始め、だんだんと人数を多くしていく中で、最終的にクラス全体での話し合いを成立させている。この丁寧な指導の段階に注目したい。

オランダと日本では、対話の文化、教育に対する考え方、教師と生徒の関係性などがかなり違う。その違いを考慮せず、そのままイエナプラン教育を持ち込むのはかなり難しい。例えば、少人数の教え合い学習を成立させるためには、どのような準備と指導の段階が必要か、そういう細かい部分を実践的に明らかにしていく必要があるのではないかな。

私は今、日本の大人達の学校観、教育観、子ども観などの転換が急務ではないかと考えている。その時の指針になるのが「20の原則」だろう。この文章は、子どもに関わる全ての人達に「子ども観」「指導観」の変革を求めている。原則を守りながら実践するには、自分の子どもに対する「スタンス」を変えざるを得ない。日々の小さな取り組みの中でも常に「20の原則」を意識し、確かめ、そこに書かれている思想を身体で理解し、子どもに軸足を置いた実践をする。それを継続していかなければ、ベンチを持ち込んでも、イエナプラン教育とは言えないだろう。このような小さな動きが広がり、繋がりがあっていく中で、そのうち日本のイエナプラン教育が生まれ、育っていくと私は信じている。



Q1. 教師でしたら現場でイエナプランを参考にしつつ実践ということもできますが、教師でない自分に何ができるだろうといつも考えております。一保護者として、イエナプランを広く知ってもらうためにどのようなアプローチができるかアドバイスいただけましたら 大変ありがたいと思います。



A:リヒテルズ直子より

イエナプランの日本での普及は、私たちの協会の目的でもありますし、そのために努力して下さる会員の方が一人でも増えることは大変うれしいことです。ただ、日本の学校教育制度には大変縛りが多いため、「教育の自由」によって理念や方法の自由を認められ、学校や教員の自由裁量権がとても高いオランダに比べると学校でのイエナプラン教育の実現には難しい障害がたくさんあると思います。特に、イエナプランの一番の核心である「異年齢学級」という形式は、日本の場合には、複式学級ででもない限り、普通の場合ではなかなかできません。

とはいえ、イエナプランの理念は、教室単位であれば、すでに、日本でもいろいろな場で部分的に試みられています。もしも、そういう試みをしている学校に居合わせた保護者の方なら、ぜひ、試みている先生と協力し、両者が心を開いてよりよい機会を生み出せるよう努力してほしい、と思います。

さて、しかし、ここでのご質問は、そうではなく、保護者としてイエナプランを広く世の中の人たちに知ってもらうにはどうすればよいのか、ということですね。放課後の学童保育、週末や休暇に子どもたちを集めた場などで、保護者の方にも関わっていただける場はまだまだあるのではないのでしょうか。

どんなによい理念も、それをいくら口で語って広げても仕方がない、結局は、自分が何かの実践をして実績を見せるしかないのではないかと、それはどんなことにも言えることですね。また、世の中に広げるためには、自分自身の実践を違う観点から見て建設的に批判してくれる仲間を持つことがとても大切だと思います。そのために、実践者同士が横につながるネットワークを作ることが必要です。この協会の目的の一つもそこにあります。参加者の安定性と継続性の高いネットワークを築いて、常に議論を重ね、お互いから学び合う姿勢を持つこと、それが、長い意味で、世の中の人たちに、その存在と意義を知らせる結果になるのではないのでしょうか。

また、保護者、という観点から言えば、家庭の中でイエナプランの理念を取り入れることは可能ですし、それを通して保護者が学び、生き方を変えることも可能になると思います。

イエナプラン教育の4つの活動とワールドオリエンテーション、「生と学びの共同体」の意味を、家庭や地域での子どもたちとの関わりの中で、問い直してみてもはどうでしょうか。

4つの活動は、対話、仕事、遊び、催しですが、これらは、それぞれなぜ必要でどんな意味を持っているのでしょうか。イエナプラン校では、なぜ、この4つの活動で、日課を展開するのでしょうか。

ペーターセンは、それが、人間生活の当たり前のリズムだからだと言っています。家庭で、親であるあなたは、子どもたちと対話し、ともに遊び、ともに仕事をし、何か催していますか。対話は何のためにするのでしょうか。対話をする時に、親であるあなたは、子どもの言葉を尊重していますか。親の権威でこちらの言うことを「聞かせる」ことばかりに集中してはいませんか。なぜ、ともに遊び、ともに仕事をするのでしょうか。催しがなぜそんなに大切なのでしょうか。それを、大人であるあなたが自分のこととして考えてみてください。もしかすると、自分自身の育ちの中に欠けていたものを発見し、これから、子どもとともに一緒に自分を育み直すきっかけとなるかもしれません。(※次ページに続く)



ワールドオリエンテーションは、イエナプランのハートと言われています。それは、子どもたちを、人々から成る地球社会に向けて、また、人類が他の動植物とともに共存して生息している自然界に向けて目を開かせていくためのものです。そのために、何か知識の片々を小出しにしたり、子どもの問いにすぐに「答え」を出すのではなく、子どもたちの「問い」を何よりも大切にしてください。子どもが何か「問い」を発したとき、お父さんやお母さんはすぐに「答え」を出さないでください。「答え」がすぐにわかっているような問いでも、「君ならどう思う？」と、自分で答え探しをする機会を与えてあげてください。そうでないと、子どもたちは、答えは人に聞くもの、世の中には、答えを知っている人がいるものだと思います。でも、そんなことはない、私たちは、知っていることよりも知らないことのほうがはるかに多いのです。子どもの「問い」に対して、「君ならどう思う？」といって、一緒に答え探しのきっかけをつかむ。すると、子どもたちは、あなたがきっとびっくりするような思いもかけない発見をするはず。子どもたちの発見の驚きと喜びを大切にしてください。そうすれば、子どもたちは、好奇心を常に絶やすことなく、また、答えのない問いにいらだつことなく、心に問いを抱え続ける忍耐強さを持って、一生学び続ける人間に育つはず。です。

イエナプランでは学校を「生と学びの共同体」と呼びますが、家庭や地域もまた、単なる生活の場ではなく、「生と学びの共同体」でありえます。学びのチャンスはどこにでもあり、私たちの人生は、学びから切り離すことができないものです。

こういう生き方が、イエナプランをきっかけに生まれていき、そういう点と点をつないで行ければ、日本でも、何か未来を変える種まきになるのではないのでしょうか。



Q2. イエナプラン教育では、3年ずつマルチエイジのグループでクラスを作っていますが、それぞれの年齢に応じて、この時期にはこのことを重点的にやろうというガイドラインのようなものはあるのでしょうか？
もちろん、一斉教育ではなく、一人ひとりの生徒ごとに違うのですが、到達目標であったり、この時期にはこのことを教育するのがよいなどあるのでしょうか？
例えば、シュタイナー教育では、7年周期でキーポイントがあったり、(参照：<http://www.geocities.jp/chamomile7jp/7rhythms.htm>)
モンテッソーリ教育でも敏感期？だかなにかで、時期に応じてポイントがあったはず。もし、そのようなものがイエナプラン教育でもあるのであれば、教えていただきたいです。



A:リヒテルズ直子より

イエナプラン教育では、シュタイナー教育の7年周期のように、何か年令段階にあわせたガイドラインのようなものは作っていません。一般的には、オランダのイエナプラン教育の場合、オランダの学校制度の一部として実践されていますから、オランダの教育文化省が提示している「到達目標」を小学校終了段階の「最低限」の目標として教育活動をしています。もともと、学年ごとに目標を定めていたのを、小学校終了段階の「到達目標」に変えるきっかけになったのも、イエナプラン教育やモンテッソーリ教育からの影響で、発達段階を、どの子にも一様に「こうあるべき」として定め、それを前提として、できる・できないのレッテルを貼ることを大変嫌います。そうではなく、一人ひとりの個性的な能力を、従来型の学校のように、学科的な学力に限定して狭く捉えるのではなく、一人ひとりの能力の特性を見極め、得意なものをもっと伸ばし、不得手のものに対しては刺激をするという態度をとります。

当然、子どもの発達段階に関しては、イエナプラン教育に限らず一般的に発達心理学者などが研究成果として作ったコンピテンシーのリストや指標など、たくさんのが現在あり、どの学校でも参考にしていますので、個別の子どもの発達を支援するときに、必要に応じて、そうした客観的な指標を参考することは大いにあり得ます。ただ、シュタイナー教育にあるように、イエナプラン独自の発達段階の定義づけというようなものは、今のところありません。

また、そうした考え方がないことが、よいことなのか悪いことなのかの判断は、私にはしかねます。

★協会のFacebookページをご活用下さい。

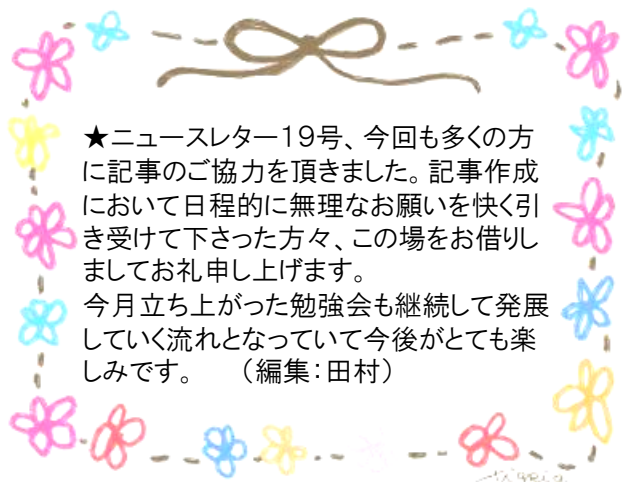
Facebook上で少しずつ情報共有や実践紹介などが始まっています。イエナプラン教育に関心を持たれている方や多様な教育に興味がある方にもどうぞご紹介下さい。また、お気軽にご意見等お寄せ下さい。

★協会、関西支部が立ち上がりました！

今号のニュースレターでも紹介させて頂きました！協会の関西支部が立ち上がる事になりました。Facebook上でもやり取りが始まっておりますので、関西在住の皆様！ぜひご覧になってみて下さい。kansai@japanjenaplan.orgが正式アドレスとなります。どうぞよろしくお願い致します。

★各支部のご案内

- 東京支部 info@japanjenaplan.org
- 千葉支部 chiba@japanjenaplan.org
- 埼玉支部 saitama@japanjenaplan.org
- 【New!】
関西支部 kansai@japanjenaplan.org
(京都支部 kyoto@japanjenaplan.org)
- 福岡支部 fukuoka@japanjenaplan.org



★ニュースレター19号、今回も多くの方に記事のご協力を頂きました。記事作成において日期的に無理なお願いを快く引き受けて下さった方々、この場をお借りしてお礼申し上げます。
今月立ち上がった勉強会も継続して発展していく流れとなっていて今後がとても楽しみです。（編集：田村）